

---

0 1

NiCo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

01

### 【Nコード】

N1539Z

### 【作者名】

Nico

### 【あらすじ】

零式オリ主がONE PIECEの世界にトリップ。（原作知識、その他なし）  
主人公は家族第一主義

エースの兄貴分にしたいくて書いた、初めての小説なので続くかはわからない。

現在子供時代

作者のハートはお豆腐

## ブローグ1（前書き）

衝動的にはじめてしまったorz

続くところまで頑張ります。

零式のネタばれが微妙？おもいきり？含まれます、未クリアで零式をクリアしてやるぜ！という方は読まないのをお勧めします。

・・・ok？

## プロローグ1

壁が壊れ瓦礫が散らばる中、エース達は意識が薄れていくのがわかった。命を賭した戦いにおいてかろうじて勝利をもぎ取る事が出来たが、戦いながら自分達はもう帰る事が出来ないとかわかっていて、いやわかってしまっていた。

意識が薄れながらも教室の前に集まり手をつないだ、死ぬ事が怖くないと言ったら嘘にはなるがさっきまでの足下から這い寄る虚無感は自ずとなくなっていた。

「最後に…会いたかったな…。」

視界も定かでなくなってきた中デューズがぼつりと零した。

エースたちはそれが誰をさしているのか名前を言われなくてもわかっていった。最後の戦いになる前にフラリと姿を消してしまった自分たちの兄貴分のことだ。ルルススの戦士に怯えて逃げ出した等という言われない侮蔑の言葉を吐く輩もいたがあの人がある事をするはずがないのは、エース達が一番わかっていった。ならば何処にと問われてもエース達にもわからない、心残りと言えればあの人が無事がわからない事だった。

大きな音を立てて扉が無理矢理開けられた、エース達は力なくそちらに視線を向けるが霞む視界のせいで人が立っているという事しかわからない。

「エース！」

その人影が大きな声で名前を呼ぶ、その声色には心配と恐怖の色がありありとにじみ出ていた。

「兄・・・さん・・・？」

エースはその声の持ち主が誰だかよく知っていた。思わず安堵のため息が出そうになるが、刻一刻と近づいてくる死がそれすらも許さないまでに体力を削っていた。

「絶対に助けてやるから・・・。」

兄貴分の力強い声が耳に届く。

それとほぼ同時にエースの眼に鮮烈な赤い光が突き刺さり、ほほに暖かいものが付いたのがわかった、戦場を歩いてきたエースにはそれが何なのか見えずともわかる。

「兄・・・さん・・・！？」

自分の前には兄がいて、頬に飛んだ此れは誰のものだか考えずともわかる。

思わず声を強くしてしまうが、言い終わる前にエース達を熱風が襲った、周りにある瓦礫が熱に耐えきれずに砕け、蒸発していく音がわかる、だがなぜ自分達が平気なのかかわからない。

視界を埋め尽くす炎が消えていき視界が開けていく、あまりの出来事に呆然としていたが自分達の体が軽く、眼が普段道理に見えていくことに気付き、自分達の兄がこの不思議な現象が起きる前に言った言葉を思い出し兄のした事だというのはわかったが何をしたのかわからずに、自分の手を見て呆然としてしまった。

「兄貴！」

ナインの怯えたような声が聞こえ眼をやると血溜まりに膝を付き体中に傷を負った兄がいた。

致命傷は明らかに胸に深く刺さったナイフだとわかる、デューズやクイーンが駆け寄りケアルを掛けているがもう助からないのが眼に見えていた。

「兄さん・・・？」

思わず涙声になってしまふ。

「おう・・・、大丈夫か・・・？ エース・・・？」

もう眼が見えていないのか視線があらぬ方向に向いている。

駆け寄り手を握りながらケアルを魔力の限り掛けるが血は止まらずにエースの手を汚していく。

失われていく兄の体温、ごつごつした力強い手から力が抜けていくのが耐えられずにエースの眼から涙がこぼれる。

「兄さん・・・なんで・・・！？」

嗚咽まじりに兄に疑問を叩き付けるが、兄が答えられないのはわかっており、兄がなぜこのような事をしたのかも予想がついていた。

「生きて・・・くれよ・・・」

兄の手がエースの手からはなれ血溜まりの中に落ちていくのがエースにはスローモーションのように見えた、それが兄がもう手の届かないところに言ってしまったのを説明されたような気分になってしまふ

「あ・・・」

びしゃりと血溜まりの中に手の甲が落ちる音と同時に兄の体が足下からクリスタルに浸食されてきている。

キングやサイスが兄から離そうと引つ張られながらも片手を伸ばすが、兄に届く事はなく兄はクリスタルの固まりとなった。

皆、兄の死を受け入れがたくうつむきながら涙を流すが、クリスタルが急に光りだすと兄であったそれは澄んだ音を残し砕け散った。



## プロローグ1（後書き）

最後の碎ける云々はオリジナルです。

ワンプ・スのワの字も出てこない・・・

どういふことなの・・・orz

## プロローグ2（前書き）

二話目です

## プロローグ 2

アルは自分が死んだことは理解していた、だが自分がなぜ意識があるのかが理解できない、弟達を助けるために命を掛けて軍神を呼んだはずだった。

アルが呼んだ軍神フェニックスは秘匿大軍神の片割れであったが彼の大決戦に使うには規模が小規模かつ攻撃力に欠けるという理由で使われなかった軍神であった。使用条件として召喚者の命を賭さなければいけないので使用する者がいなかったのだが、アルはマザーから渡されていた。

「使う使わないはあなた自身が選びなさい、選ぶべき時は自ずとわかるはず。」

マザーの言葉が死に体の弟達を見たときに頭に浮かんた。

朱雀クリスタルがルシを求めたとき、アルは呼びかけに答えていた、ただし力よりも弟達を守る力を求めたことによって攻撃に関しては補正が少なくされてしまった。

その後急いで弟達と合流をしようとするが既に戦いは終わっており息絶える寸前の弟達がいるのみだった。

暗がりの中アルは目が覚めた、固い石の地面に無造作に横たわっているのはわかったが自分で体を動かす事も出来ない、頭を動かして建物に囲まれた薄暗い路地裏という事はわかったがここが朱雀領の何処なのかそれ以外の場所なのかわからなかった。

明るい方からは喧騒が聞こえてきており人がいるという事はわかったが、万が一白虎領であった場合は眼も当てられないので自分の体力が回復するのを待つしかなかった。

眼をつむり混乱する頭を落ち着かせる、頭に浮かぶのは弟達のことだが自分の今際の際に泣きながら駆け寄ってきたのが記憶にあるので軍神の使用は上手くいったのであるとあたりをつける。

「（泣かせちゃったな…）」

泣かせたくなかった、笑って欲しかった相手に泣かれてしまったのがアルにわずかな罪悪感を残していた。

魔導院に引き取られたときにはまだ小さく自分がなぜ親元を離れここに来たのかわかっていない様子で不安そうな瞳でこちらを見上げてきた。

アギト候補生になると決まったときに武器の扱いを教えたのは自分で、小さな体に不釣り合いな大きな武器を振り回していた、弟達の才能は眼を見張る程で見る見るうちに自分を抜かした。

弟達との思い出を振り返っているうちに体が動かせるようになっていくのに気がついた

「よいしょっと」

地面に手をつき立ち上がると、明るい方向へと歩を進めた。

「ローディー海賊団船長、ローディー・ホルフマンの処刑を始める！」

男性の良く通る声がアルの耳に届いたが、アルにはその内容がいまいち理解できなかった

男がいう処刑という言葉も、処刑されるという言葉も何をさしているのかわからなかった。

しばらく路地裏から様子を伺っていると大柄ながつしりとした髭面の男が手錠に繋がれながら白い制服を着た男二人につれられて広場にやってきた、と同時に広場に集まった者達が一斉に声を上げた。

「シネ！」「地獄に堕ちろ！」「早く殺せ！」

聞くに堪えない罵倒雑言とともに男に向かってゴミや石等を投げつけていく、投げつけられている男は口答えする体力もないのか俯いたままそれらを受け入れている、それに気を良くしたのか広場は罵倒雑言で溢れ、投げつけられたもので男は額や至所で血を流し始める。

アルはその様子に背筋が寒くなった、罵倒を浴びせる者達の顔は愉悦に口元が歪んでいた。しばらくその様子が続くと最初に号令をかけた男が片手を上げる、それを見た途端に民衆は大人しくなり耳が痛くなるような静寂が訪れた。

「ローディ・ホフマンの罪状を述べる。この平和な町の良き民達を怯えさせ、ピースメインであるという偽りを吐き町への侵入を試みた。」

此れは許されざる行為である、よって死刑に処す異議のある者は申し出よ。」

静寂の中男の感情を感じさせない冷徹な声が響いた。

「死刑！」「死刑！」「死刑！」

民達は声高らかに死刑を望むこえをあげた。

「異議はなし、執行せよ。」

男は近くに控えていた制服姿の男達に命令を下す。

男達は海賊に首かせを付け階段を上らせる、民達の声がうるさい中アルには男の上る階段の軋む音が耳障りに耳にこびり付いてはなれなかった。

階段を上りきるとそこには片刃の大きな鉄とそれを上部に付けられた門のようなものがあつた、男を膝まづかせ首かせを固定すると民達の熱狂はピークへと達した、海賊の男はぐるりと青ざめた顔で広場を見渡すと唇を小さく動かした

「（ウランデヤル）」

男の眼とアルの眼が一瞬あつた気がした。

コートを羽織つた男が右手を振り下ろし制服の男の片方が刃を繋いでいるロープを切り落とした。

ドズンと重い音を立てて男の首が落ちた、民衆はそれを面白いものを見たばかりに口元に笑みを貼付け顔を赤く染めながら叫んでいる、男はそれを満足そうに見回すと首を回収させ狂気が渦巻いている広場に背を向けた。

アルには今目にした光景が信じられなかった、あたかもショーのように人の命を絶ちそれを甘んじて受け入れ狂喜する民衆、そして死者を忘れる事がないという事に気付き愕然とし、頭を抱え座り込んでしまった。

しばらくへたり込んでいると、ふと男の頭を回収したのが気になっってしまった

「レビデト」

アルは浮遊呪文を唱え呪文がキチンと効力を発揮した事に安心しつつも急いで制服を着た男達の去って行った方向へと民家の屋根を掛けて行った。

## プロローグ2（後書き）

FFの呪文が出てきました

最初の呪文が此れかよ…

またしても原作陣が出てきませんorz  
このペースだといつになる事やら・・・



### プロローグ3（前書き）

残酷（？）描写がふくまれています？

もうすぐ大学一年生が終わってしまいます、この間入学したと思っ  
たらはやいものだなー

### プロローグ 3

アルは屋根を駆け男達の後を追う、男達は首頭と尖った棒、そして大きな旗のようなものを持ちながら町の中心部からどんどんと早足で遠ざかって行った。

結局男達が足を止めたのは町の反対側に位置する砂浜、いや荒野といったいいような荒涼とした場所だった。見つかるはずだと直感的に考えているアルは小声で呪文を唱えた。

「インビジ」

アルの姿が背景と同化していく。

透明と化したアルの耳に目的地に到着したのか命令を下す男の声が聞こえる、遠すぎるので何を言っているのかはわからないが男達の行為と周りにあるものを見て愕然としてしまった。

男達は海賊の首を棒の鋭利な先に刺すと其れを地面に突き刺し、旗をその棒に結びつけていたのだ、周りにあるものを見ると真新しいものから古く風化した頭蓋骨や破れかけた旗がはためいていた。

アルにはこのような死者を冒瀆するような行為が信じられなかった、薄々感じていたがこの世界は自分の知る世界ではないのだろう、知らない町並みに文化移動手段として発達しているらしい船、そして死者を忘れないという事実。アルのいたオリエンスならばクリスタルの加護によって死者の記憶は一切消去される、があの男の顔を言葉を忘れる事が出来ていない、此れが示すのはクリスタルの加護が存在していない世界であるという事だ。

其れを踏まえた上で目の前の行為はアルには信じられない程に残虐きわまりない事だった、アルはまたしても気付かずへたり込んでしまっていた。この世界には自分の常識が通用しないことや不安だらけの場所に一人放り出されてしまったのを悟ったからであった。

アルは呆然としながら町の通りを歩いていて、一般市民の格好を見る限り深紅のマントを羽織っているのは怪しいというのは予想していたのでマントと上着は脱ぎ上は黒いタンクトップ一枚だがこの島は比較的温暖なため寒くはなかった。アルにはこれからどうすれば良いのか全くわからなかった、金銭も常識も身寄りも身分もないアルはまさしく孤独だったのだ。

町民が白い制服の男に相談をする場面を何度か見たがアルには相談する気にはなれなかった、下手な事をして尋問、万が一にも処刑されてしまうという恐怖が拭いきれなかった。

トボトボと歩いているアルに快活な声が掛けられる。

「お兄さんどうしたんだい！そんなしょぼくれた顔をして！」

恰幅のいい女性に店先から声を掛けられたあるは思わず体をかたくしてしまった

「い、いや何も」

思わず曖昧な返事を返してしまうと女は訝しげに眉をひそめた

「？本当にどうしたんだい？」

今度は心配の色をありありと滲ませながらアルに問いかける逃げられないと悟ったアルは嘘をつく事に決めた

「いや、財布を落としてしまっただけ。今一文無しなんだ、それでどうしようかと…」

アルは困った人の雰囲気を出そうと肩を落としながら覇気のない声で答えた

「そりゃあお気の毒に…」

女は眉の端をおとし同情の眼差しを向ける

「出来れば仕事に心当たりがあれば教えてもらいたいのだが…」

アルは出来るだけ丁寧な言葉遣いを意識して女に話す

女は悩んだ末に言葉を発した

「そんな余裕のあるとこなんて無いと思うけど、もしかしたら海軍のところにや何か仕事があるかもしれないよ？行ってみたらどうだい？」

アルは聞き覚えの無い軍隊に内心首を傾げるが疑問をお首にも出さずに女に問いかける

「海軍にはどうやって行けば良いのかね？」

女はおかしなことを聞く男だと思いながらも丁寧に教えてやる

「あの大きな建物だよ、町の何処からでも見えるから道には迷わないはずだよ、わからなくなったら近くの奴に聞きな」

女の指刺す建物に目をやりアルは血が引いた、その建物に大きく印されるマークは制服を着た男達の帽子や胸元、羽織るコートに印されるのと同じ蒼い鳥が翼を広げているマークだったのだ。

アルは顔が青くならないように気にしつつ女の方へ向きなると  
礼を言い足早にその場を去った。

---

この町にいても働く当てが無く野垂れ死ぬだけだとわかったアル  
はこの町に見切りをつけ、顔を覚えられたり不審に思われないうち  
に早々に町を出るべきだと考え歩を進めた。

### プロローグ3（後書き）

ああ、原作が遠い…

いつたいいつになる事やら。

## プロローグ 4

町の中を歩いてみた限りこの世界には飛空艇や列車というものは移動手段として確立はしておらずほとんどの移動は帆船が主立ったものだというのがわかった。

「（どうするか）」

アルは今悩んでいた一文無しの自分が船に無償でのせてもらえる可能性はゼロと言っていい、お金を稼ごうともどこに行ってもあの幅の良い女とにたような答えが返ってくるだけだった。

「（仕方が無いか）」

さんざん考えたが良案は浮かんでこずただ突っ立っていても問題が解決する訳でもないので、少々良心が痛むが強硬手段をとる事にした。

「インビジ」

アルは物陰で姿を消すと目についた商船らしき船へとテロップを上り潜り込んだ。

アルは弟達の事が絡むと臆病な程に慎重になり物事を深く考えたり悩んだりするのだが、自分だけの事に関しては驚く程に楽観的であつたり考えなしの行動をする事があつたりする。今回は其れが裏目に出てしまった良い例だといえるだろう。

アルは早くも自分の短慮を後悔していた

「（き、気持ちわりい）」

帆船に乗った事がないアルは見事に船酔いになっていた、乗ってしばらくは大丈夫だったのだが風が強くなり船が左右上下に激しく揺れ始め、アルの隠れる物置はまるでカクテルシェイカーのように揺れに揺れアルはあっけなくダウンしたのだった。

アルは知る由もないのだがアルの乗る商船は嵐のど真ん中にいた、航海士の予想を上回る規模早さを持つ嵐に商船はもみくちゃにされておりこのままでは船の放棄も念頭に置かなければならない程に切羽詰まっていた。

アルはぐったりしつつ耳に入る強い風の音に蒼龍との総力戦のことを思い出していた。一時期押され気味になっていたが候補生達の奮闘により勝利は目前と迫っていた蒼龍戦だった。がルシ星姫に撤退を余儀なくされ下手をすれば負けてしまう所だった、撤退の際に自分たちがおいて行かれ全滅というところにマザーの助けが無ければ大きな被害を朱雀軍に齎しているところだった。その時の星姫に瀕死にされて行く弟達を前に無力な自分を思い出して物置の中アルは一人うなだれていた。

アルが物置にて回想に耽っているころ、船長はこの船を放棄する事を決めていた。嵐の中船底にはすでに何力所か漏水がひどくなっており沈むまで後一時間あるか無いかといったところであった、積み荷はあきらめる事になるが命の方が大事だと判断した船長は副船長他に避難命令を下した。

船員は逃げ遅れている者がいないか船の中を駆け回るが見当たらないと判断すると最後の避難船で船を後にした。



アルは世界を移動してから一睡もしていなかった疲れが出てきたのか気絶するかのように深い眠りの中に落ちていた。

---

「いつて！」

アルの頭に柵から落ちてきた荷物の角が直撃し言いがたい痛みで転げ回っているのとふと不審に思った、眠りに落ちる前の忙しい足音や喧騒が聞こえず風の叩き付ける音や雨音しか聞こえなかったのだ、アルは自分にまだインビジの効果が続いている事を確認すると警戒しながら扉を開いた。

「うどわっ」

扉を開いた途端に水が怒濤の様に押し寄せてアルは尻餅をついてしまった

「っち、レビデト」

びしょぬれになってしまったアルは舌打ちしつつも浮遊呪文を唱え廊下を警戒しつつ進んで行くが海水に浮かぶ木片や荷包みだけでひとつこ一人見当たらない、思わず眉をひそめるが止まる訳にもいかず甲板へと向かった。

「なんじゃこりゃー！」

アルは思わず声を荒げるが、風にかき消されてしまう甲板にも人影は見当たらないのだが、帆は破けて荷物は散乱して雨は体を叩き付け波はときおり甲板に乗り上げてものを破壊して行く、アルは慌て

て船内に戻るが此れからどうすれば良いのか途方に暮れてしまう。

このままではどうしようもないと覚悟を決め甲板へと扉を開こうとした時船が大きく傾いた、船首が持ち上がり船は沈み始めたのだ。船はゆがみ扉は開かなくなるが扉の隙間からは容赦なく水が流れ込んでくる。

「ファイア！」

慌てて扉に火球をぶつけるが頑丈に出来ているのか表面が焦げてしまっただけで中までは入らなかった。

「ファイガ！」

先ほどの火球よりも何回りも大きな火球を放つ、アルは後ろと前から迫ってくる水と言う初めての状況に冷静さを失いかけていたのだ。放たれた火球は扉に炸裂し破壊には成功したがアルも炸裂した時の衝撃によって壁に激突し気を失う羽目になってしまった。

暗転する視界の中壊れた扉の向こうから押し寄せる水を最後にアルは意識を失った。

## プロローグ4（後書き）

・・・この後について

## 魔法一覧（前書き）

使用した魔法を載せていきます

1 2 / 0 9 「ウォーター」を追加

1 2 / 1 0 「ヘイスト」を追加

1 2 / 1 1 「スロウ、デスペル」を追加

1 2 / 1 5 「ケアル・ケアルラ・ケアルガ」を追加

1 2 / 1 8 「武器生成」を追加

## 魔法一覧

### インビジ

姿を景色と同化させ相手に認識させない魔法。

### レビテト

自分を浮かせる浮遊魔法、移動も出来る。

### ヘイスト

自分の体感時間を引き延ばし、また体の反応速度等も早くする魔法。インビジや他の補助魔法と比べて効果の続く時間は短い。

### スロウ

相手の体の進みを遅くする魔法、体感時間はいじらないので感覚と体の間にログが生じとても悪質な魔法。複数を対象に出来るが効用時間や成功率が単体を対象にした場合よりも下がる。

### デスペル

スロウ等の呪文の効果を消し去る、対の魔法としてエスナが存在する。

### ケアル・ケアルラ・ケアルガ

アルの世界で一般的な回復魔法、ランクが上がると回復可能人数、

範囲、量が増える。

回復魔法として凡庸性は高いが瀕死の重体や心肺停止状態には利き辛い等の欠点もあり、レイズやアレイズとの平行した利用が望ましい。

## ファイア・ファイガ

火球を飛ばす攻撃魔法。攻撃力や火球の大きさはランクが上がるごとにあがる（ファイア ファイラ ファイガ）。応用で火球をゆつくりと相手を追尾する炸裂弾にしたり、自分の回りに炸裂させ囲む敵をなぎ払ったりとの芸当も可能。

## ウォーター

水を生み出す魔法、攻撃にも使えるがサバイバルにも使えるよう設計された。他の魔法より応用が利き相手を水球に閉じ込める等の芸当が可能ただしこの場合は相手が抵抗をすればすぐに水球がはじけてしまうのでサンダーや他の魔法との連携が主。ランクが上がると水量が増える。

## 攻撃魔法のタイプ

- ライフフル RF まっすぐ飛んで行く
- ショットガン SHG 前方に広がる近距離用、多段ヒットする
- ボム BOM 自分を中心に周囲に炸裂させる
- ミサイル MISC 相手を追尾する
- ロケットランチャー ROK 好きな方向に発射出来、着弾点で炸裂する

## 武器生成

魔力で武器を作り出す、作り出した武器は本人にしか扱う事は出来ないが精神的摩耗も少なく何処にでも武器をもって行けるので便利。

## プロローグ 5

アルは幸運だった、ただし遭難した事をのぞけばだが。

アルは海の上を漂っていた、幸運な事にうつぶせではなく仰向けで、そしてレビデトの効果が続いたまま。つまり気絶したままであっても溺死する事も無かったのだ、もしレビデトの効果が切れていたり仰向けであった場合アルはあえなく溺死してしまっていただろう。

アルは手足が冷たいのに気がついた腕は手から肘あたりが足は膝位までが冷たかった、はつきりとしらない頭で何があったかを思い出していたが頭が全く働かない、ぼけつと見上げている太陽の温かな光が気持ちよく眠たくなってきたしまった時に大きな波がアルを襲いアルは何がおこった野かを思い出した

「あーーーーーっ」

誰もいない海上にアルの大声が響く、自分が自滅し荒波狂う海の中に放り出されたのを思い出し慌てて上体を起こそうと手を付こうとするが予想した場所に物は無く手は空中を滑り海面へと着水した。

「は?」



アルは自分の状態をやつと理解した、自分は漂流しており直前に唱えたレビデトの効果で辛うじて海の上にかかっているのだということ。

アルの顔は瞬く間に青くなっていく、自分が何処にいるのか何処に向かえば良いのか全くわからない状況で、食料も水も何も無い状況で海の上に一人きりというのは航海をした事が無いアルにもまずい状況であるのは十分すぎる程に理解できてしまった。

「冷静に、冷静にだ…冷静に、うん」

自分に言い聞かせるようにブツブツとつぶやく、端から見れば完全に不審者だった。

「と、とにかく。レビデト」

はつと我に返ったアルは自分にレビデトを掛けなおし海面の上に浮上した。

回りを見ても海、海、海の状況に絶望しかけたが思考を出来るだけ前向きにしていこうと深呼吸をし、此れから先の事を考え始めるが、ここの地理を知っている訳でもない自分がゴチャゴチャ考えても無駄であるとの結論に達し開き直るアル。

「まっすぐ行けば、どっかに着くだろ」

基本安直なアルは安直な考えで出来るだけまっすぐに空と海の境界線へと飛び始めた。

「（青い、青いよ）」

何処まで行っても青い海にアルは疲れを感じていた、最初のうちは見た事が無い程に青く透き通った海と海に生きる見た事が無い生き物に目を輝かせ、弟達にも見せてやりたいな等と空の旅を楽しんでいたアルだったが、いつまでも同じ青が続いてくると流石にうんざりしてくるのは自然な事だった。

「あー、はらへったー！」

アルの大きな独り言が空しく響く、もう何日も何も食べておらずそろそろ空腹の我慢が利かなくなっていた、もうここまで何度もレビデトを掛け直しつつ進んできたがこの世界に来てから何も口に入れていない、水はウォーターを唱えて自力でなんとかしていたが携帯食料やレーションも何も口に出てこないのが我慢出来なくなった。一人大声を出してみたものの空腹を促進させたばかりで悲しくなってきたので、雲の形を楽しみながら進んでいた。

もう何日進んだらうか、何回も遠目に嵐の曇らし雲が見えたが

嵐に直撃するのは幸運にも一回ですんだアル、しかしこの世界にきた時の面影は薄くなってきた、ひげは伸び髪の毛は潮風にさらされ続けばさばさになり何日も食べ物を食べていないため目から覇気は消え頬は痩けてきていた。

アルはもう惰性で飛んでいるようなものだった、レビデトが解けない間しか浮いていられないので睡眠も満足にとれず食料もない、いつになったら陸地に付けるのか明確な希望も無い、陸地に着いても食料にありつける確信もない。アルの頭にははただただまっすぐに飛んでいく事しかなくなっていた。

## プロローグ 6

アルの目には陸地が遠目に見えていたが、ここまでくる間にも何回か陸地が見えたという事があったが其れはすべてアルに都合の良い幻でどんなに進んでもたどり着くことは出来無かった、今回もどうせ幻であろうとあきらめながらも少しの希望を持ちつつ陸地に向かっていった。

アルは興奮していた、幻だと思っていた町がもう目の前まで近づいてきている、ようやく食べ物にありつけると空を飛ぶスピードをあげるアルは鼻につく悪臭には気がついていなかった・・・。

アルは呆然としながらゴミの山の前に佇んでいた、最初に海から町へと入ったのだが入ってすぐに警官らしき男性に呼び止められ即座に町を門から追い出されてしまった、普段なら突っかかる元氣もあったのだが、アルは声を出す事もおっくうになっていたのだった。目の前のゴミ山を見ると比較的町のすぐ近くのゴミ山のせいかゴミが新しい事に気がついた、中にはほとんど手がつけられないパン等が袋詰めになって捨てられているのが確認できた、アルは其れを目にするや否や自分に呪文を掛けパンに向かってダッシュした。

「ヘイスト！」

アルは目にも見えない早さでパンの袋に向かって飛びついた、周り

で他の獲物を狙っていた乞食達は遠くにいたアルが急に目の前にいるという現象に驚き手が止まってしまい略奪競争に負けてしまう者もいた。

そんな事もおかまいなしにアルはパンのはいつている袋をひん掴むとまた目にもつかない早さでその場を去った。今まで空腹のあまり気になっていなかった悪臭が今になって耐えられなくなってきたしまったのだ。

アルは力の限り走りゴミ山から離れようとするがゴミ山のあるところが思ったよりもずっと広い、もうあきらめてパンを食べようかと思っているときに目の前が開け緑生い茂る山の斜面が見えてきた、周りに僅かに残る乞食達がなぜあの山に入らないのかに少しばかり首を傾げながらに山の斜面を駆け上った。

駆けていたのでさほど気にはなっていないがアルはこの山に乞食達が入りたがらない訳がわかった、先ほどから見える獣達がベヒーモスかと思う程図体がでかいのだ

「（こりやあしょうがねえな…、一般人には危なすぎる何時食われるか気が気じゃねえ。）」

アルは一般人とはかけ離れた存在なので気にも留めていなかったが、食事の邪魔をされるのもうっとうしいので切り立った崖の上に腰を下ろすと、袋を広げると、パンを驚掴みにするとほとんど噛まずに胃の中へと流し込んでいく、この世界初めての食事が残飯であったがアルは其れが気にならない程パンが御馳走に思えた、このときアルの目尻にはうっすらと目尻に光る物がみえていた。

いつの間にか袋一杯のパンを食べ終わったアルは今後の事を考え始めた、又別の場所に向かって旅を始めるのはどうにも微妙に思える、今度は何日かかるか分からない上に無事にたどり着けるか分からない、不確定要素がてんこ盛りな次の旅路に出るより、或る意味安定した食料の入手が出来るここにいた方がアルは良いような気がした、いざとなれば獣を狩って腹の足しにすれば良いアルはそう考えていた。そのときアルの事を木陰から見ている小さな影にアルは満腹感で油断していたため気づく事が出来なかった。

## プロローグ6（後書き）

ちよつと短めか？

ようやく原作キャラの影が！

## 第一章 一話

一ヶ月程このゴミ山の中で暮らしているとここにも独特のルールとコミュニケーションが存在しているのが分かった。ここでは力こそが全てであると考えられている節がある、そのため老人や女子供は立場が弱くなりがちで、海賊が幅を利かせている。

他にもあの膨大なゴミの山はゴア王国から排出されている事や、ゴア王国では王制が適応されており権力は王と貴族に集中している、そのため貴族達は選民思想が高く一般市民とは深い溝があり一部を除き不満は何時爆発してもおかしくない程高まっているらしい。

「（それにしても、気付かれていないと思っっているんだろうな…）  
はあ」

アルは思わずため息が漏れてしまう、最初は警戒しているのだろうと放っておいたが一向に監視をやめる気配はなく交代でアルがこの山にいる間だけ監視をしているらしい、気配から探るに二人で行動しているらしい何日か注意して探ってみたがある一定の規則でローテーションをくんでいた。

いい加減にらみ合いをするのも面倒になってきており、食事の時からい落ちついて食事をしたかったアルは攻勢に出る事にした。もしバックに海賊や最悪貴族がいた場合面倒になる事はわかっていた。最初の町では精神的に参っていて気付く暇がなかったが落ち着いてみると、この世界には魔法という物が存在していない、人間というものは基本排他的な生き物なのでこの力がばれたりするととても面倒くさい事になるのはアルにはわかりきっていた。もし貴族等という下手に権力のある物や力を求める海賊や海軍にばれたりしたら



逃げ回る羽目になるのであまり口外して欲しくないのだ

「（片付けるか？）」

このゴミ山で弱みを握らせたが最後、骨までしゃぶられて捨てられている人間を何人も目の前にしていたアルは思考を戦場にいる時と同じように油断も容赦もしない冷淡な思考に切り替えていた。

思い立ったが吉日、アルは計画を練り始める。片付けるのならば二人同時でなければ意味が無い、一人でも残せば後でどうなるのか分からないのだ。子供を殺すのは出来ればしたくないが殺すと判断すれば容赦はしない事を決めた。

「やりたくねえな」

星が輝く空を見上げアルは思わず本心を漏らしてしまった。

二人同時に片付けるのなら交代の時間を狙うしかない、つまり我慢比べの様なものだ、監視は山の中にいるときのみ行われていた。アルは山に残り続け子供が疲れ交代の時間が最後のチャンスだと考えていた。

夜中から初めてもう水平線上に太陽の光が漏れ始めていたが未だ交代する気配がない。

「（ねばるな）」

行軍の時は何夜か徹夜するのが当たり前だったアルには此れくらい苦ではなかったが子供の成長途中の未成熟な体力ではそろそろきつ

いとアルは踏んでいた、現に子供の気配は眠いのかフラフラと定まらなくなっている。

それから数時間経ち太陽が昇りきったときにチャンスは訪れた、子供の気配がもう一つ近づいて来るのがアルには分かった。子供が接触したとき勝機と見たアルは自分と保険として相手にも魔法を掛ける

「（ヘイスト！スロウ！）」

小声で呪文を唱えたと子供たちの背後に回ると今来た子供の首を掴み監視をしていた子供の呪文を解く

「デスペル」

帽子をかぶった子供は慌てた様子でアルの方へ振り返りつつ距離をとるが、自分の相方が捕まっていると分かると少し離れた所で鉄パイプを握りしめながらアルを鋭い目つきで睨みながら警戒していた。

少しの間睨み合いが続くが、アルは微塵も油断をせず自分が首を掴んでいる子供と目の前の子供に注意を払いつつ口を開いた。

## 第一章 一話（後書き）

やっとプロローグから脱出！

## 第一章 二話

黒いクセツ毛の男の子の首を掴んだまま帽子の男の子に問いかける

「お前、名前はなんだ」

アルの淡々とした問いかけにひるむが震える声で答える

「だ、誰がお前なんかに！」

アルは冷たい目で其れを一瞥すると片手に掴んでいる首に力を加える。

「くあつ」

苦しげな声をあげ抵抗を強めるがだんだんと抵抗が弱まっていく

「エース！」

悲鳴の様な叫びがあがる

「エー…スだと？」

アルは思わず手から力が抜けてしまふ、別の世界に置いてきた弟と同じ名前に動揺してしまい隙が生まれる。

エースと呼ばれた少年はここが好機とばかりにアルの手から逃れ、アルを鋭い目つきで睨みつけ憎しみを込めた声で叫ぶ。

「お前！俺を殺しに来たんだろ！さっさとやれよ！」

アルはエースの言っている事が理解出来ずに眉を潜める、こんなにも小さな少年に殺せと言われる様な心当たりは無かった。

「サボには、サボには手を出すな！俺を殺しに来たんだろうが！」

帽子を被ったサボと呼ばれた少年を後ろ手に庇いながらアルを睨みつける視線は揺るがない。

「…お前を殺す意味は俺にはない。そもそもお前が誰なのか知らん。」

アルはエースに答えるが警戒が解かれる事はない

「嘘を言うな！あいつが俺の父親だから殺しに来たんだろう！世界政府の手先の癖に！」

エースの声は段々と大きくなっていく。

「あいつ？」

アルは訝しげな表情を浮かべる。このときこの状況を一步引いた心境で見ていたサボはこの男が嘘をついていない気がした

「（エース）」

小声で其の旨をエースに伝える、エースは眉を潜め困惑した表情でアルに向き直り手にしていた鉄パイプの先端をアルから地面へと下ろした。

エースが冷静になったところでアルは気になっていた事を尋ねる

「お前達は誰かの命令で俺を監視するように言われたのか？」

もし此れを肯定された場合、背後関係を吐かせた後命を絶たなければならなかった。

「……いや、町から出て来たのが見えて。それからコボル山に入ってから、俺やサボを狙ってるのかと思って警戒してた。」

未だ警戒を完全に解いていないがエースは素直に質問に答えた。

「次の質問だ、お前らはここで二人で暮らしてるのか？」

アルが質問を投げかける。

「いや、エースの爺さんが山賊に俺たちを世話するように頼んで、そこに寝泊まりさせてもらってる。」

今度はサボが答える。

「じゃあ、最後の質問だ。……お前の言う父親、あいつ、とは誰だ？」

アルは思わず厳しい声が出てしまう

「……………言えない」

時間を置いてからエースは苦しげに答える

「そうか……」

アルはそう呟いてエース達から視線を外す

「もう行つていいぞ」

二人に興味無さげな声を掛けるとアルはきびすを返し森の中へと姿を消した。

二人は慌てて男の後を追うが姿を捉えられず不思議そうな表情で顔を見合わせグレイターミナルへと続く道を進み始めた。

## 第一章 三話

エースとサボはアルと分かれたあと行っていた強奪行為により少々まずい状況に陥っていた。強奪を行った海賊達に宝を盗んだところを目撃されてしまったのだ。

「はあはあ」

エースとサボは必死になってコボル山に向かって走っていた。

「待ちやがれ！ガキども！」

柄の悪い男達の声が後ろから飛んてくる。エース達は自分たちの庭の様なコボル山に逃げ切れたらとりあえず命の無事は一時確保する事が出来たが、大人と子供の覆しがたい体格の差によって刻一刻と距離は詰められていった。

「捕まえたぞ！ガキ！」

あと僅かというところで、男達にエースと比べて体力の少ないサボは捕まってしまう首根っこを掴まれる

「お宝の場所を吐いたら助けてやっても良いぞ」

男達の中で一際偉そうなひげを生やした男が未だ抵抗の意思を無くそうとしていないエースに向かって脅しを掛ける。男はサボの首を片手に持つサーベルの腹で撫でる。

「くっ」



エースはこんなところで大事な相棒の命を失う訳にはいかなかった。

「宝を隠している場所を教える…だからサボを離しやがれ！」

エースは悔し気に唇を噛み男達に自分たちが集めた宝の場所を吐く決心をした。

「おふぉ、中々に宝があるな！」

海賊の船長は興奮した様子でエースに皮肉を込めた笑みを顔に貼付けて話しかける。その声をエースは無視したが船長は其れが憎たしくみえた

「粹がつてるんじゃないやねえよ！」

エースの頬をを握りこぶしで力一杯殴りつける。

「ぐっ」

エースは体が壁に叩き付けられうめき声を漏らす

「野郎ども！お宝を運び出したらガキどもに大人の怖さって奴を教

えて差し上げる！」

船長の男はげびた笑い声を上げて宝を貯めた貯蔵庫を後にした

「サボには手を出さねえ約束だったじゃねえか！」

エースはその背中に憎々し気に怒声を上げるが男には聞こえていないのかそのまま姿を消し、エース達の周りにはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべた男達が立ち囲んでいた。

エース達は男達の暴行により体の至る所に痣が出来痣の無いところを探す方が難しい程だった。サボは途中で意識を失ってしまい、エースはサボを自分の体の下に置き必死になって庇っていた。

一方で、男達は悲鳴一つあげない子供にいらだっていた、うめき声を上げて泣き叫び命乞いをしないこの小さな子供は男達の神経を逆撫でするには十分だった。

## 第一章 四話

男達が暴行を初めて数十分、エース達には数時間にも及ぶような時間はエースがうめき声がしなくなつて終わりを迎えた。

「く、此れぐらいにしてやる！」

男達によつて僅かにも動かなくなつたエースとサボを廃屋の中に残して男達は去つて行つた。

男達が去つてから暫く時間が経ちサボは目が覺めた

「うつ」

体中がズキズキと痛み思わずうめき声を漏らす但至少でも体を動かすとその度に体中に鈍痛が走つた。思わず顔を顰めるが自分よりも長く意識を保つていたであろうエースの姿が見えないのが氣になつた。

サボはあたりを見渡し廃屋の隅の影に隠れるように打ち捨てられているエースを

見て思わず息を呑んだ、エースの体は見渡すところ全てが内出血により青くなっており服はがエースの血に赤く染まり、流れた血がどす黒く固まっていた。

「ひでえ」

思わず涙声になってしまふ、このままともな治療を受けられなかった場合エースの命は消える事になってしまふだろう。今まで二年程だがともに相棒として過ごして来たサボにはエースが死んでしまふかもしれないという事実は受け入れがたいものだった。

廃屋の入り口に影が差し廃屋の中が暗くなる、男達がとどめを刺しに来たという可能性が頭をよぎり、サボは泣きながら武器をとった、たとえ助からずとも自分が敵わなかつと親友を汚したく無かった。

「だ、だれだ！出て行け！俺が相手をしてやる！」

サボは思わず声が震えてしまふが、体は前に前にと進みエースの体を後ろに庇っていた。

「ああん？」

片手で頭を掻く無精髭に覆われたその顔にサボは見覚えがあった、他の頼りない大人達よりも少しはましかもしれないと藁にもすがる思いで助けを求める。

「た、助けてくれ！エースが！エースが…」

最後の方には目から涙を流し声を震わせるその様子にただ事ではないと感じたアルは廃屋の中をよく観察する

「なっ」

サボの後ろには瀕死の様相の少年が弱々しく呼吸をしており思わず先日との違いに驚きの声を漏らしてしまふ。

「助けてくれよ！死んじゃうよ！」

サボの悲鳴の様な声とエースの弱々しい呼吸音が廃屋の中で耳につく

「ちっ」

アルは胸くその悪さに思わず舌うちをするが、其れを勘違いしたのかこの状況に耐えられなくなったのかサボは嗚咽を漏らすだけとなった。

「さ、さぼ・・・そんなやつに・・・たのまなくていい、、おれはだいじょうぶ、だ」

サボの声に目を覚ましたのかエースは目を覚ますが目はサボを見ずに虚空を見つめており呂律の回らない言葉が口から出る。そのエースの様子と残して来た弟達が被って見え、アルは言いよつの無い苛立を感じエースの側へと寄ると呪文を唱えていた。

ほわりとアルの手に優し気な緑光が灯るとその光は段々と大きく強くなつていく、廃屋の内部を照らし出す程に大きくなると光の灯った右手で空を切り、静かだが力強く低い声で呪文を紡ぐ

「ケアルガ」

アルの手に灯る緑光は廃屋の中に弾け、エースとサボの体に降り注いでいった。

## 第一章 五話

空に緑光が溶けていく幻想的な光景にサボは気付かないうちにぼんやりしていた。

「う、ん」

エースが声をあげてゆっくりと起き上がりサボは我にかえる

「エース！大丈夫なのか？」

サボは急に起き上がったエースに驚いたが顔色が随分とましになっている事に安堵した。

エースはさっきまでの死に体だった自分の体調が万全と言っても差し支えない現状に顔には出さないが驚いていた。

自分の手を握り体の調子を確認していると、アルの苛立った声が聞こえた

「なんであんな事をした、手を出したら危ねえ事くらい分かるだろう」

アルはこの子供達の命を投げ捨てる無謀さや向こう見ずな態度にイライラしていた。

サボはアルの睨みつける視線にバツが悪くなり俯いてしまうが、エースはキツとアルを睨むと目の中に確固とした決意の炎を灯しアルに答えた

「夢のためだ！」

エースの声に触発されたのかサボもアルを見上げる。その二対の瞳にアルは思わず笑みがこぼれてしまう。あの世界で弟達を守るという生き甲斐しか見つけれず、惰性で生きていた自分とは違い幼いながらに夢へ向かい走るその姿はアルには眩しく、この暴力のまかり通る世界において尊いものに見えた。

厳しい声の調子から急に優しくなまなざしを向けてくるアルにエースは戸惑っていた、そこにアルは声を掛ける

「お前達の夢は知らんがそこまで一生懸命になれるのだからお前達には大切な事なのだろう、だがだからといって命を投げ捨てて良いという訳ではない。」

そこでだ、俺は戦う訳にはいかねえがお前達の夢が叶うまでお前らを守ってやる」

声は相変わらず厳しい声だったがその中に自分たちを気遣うものが混じっているが分かったので二人は黙っていたがアルの投げかけた提案があまりにも急な事だったので俯かせていた顔を勢い良くあげると、そこにはアルが不適な笑みを浮かべながら腕をくみこちらの答えを待っていた。

「……………たのむ」

暫く沈黙が続いたが小さな蚊の鳴くような声でサボは頭を下げた、エースはその様子を信じられない目で見つめ少し怒りのこもった声でサボに詰め寄った



「サボ！」

エースの言葉には言葉に出さないが言外になぜこの男を受け入れたのか責める響きが含まれていた。

エースの大きな声にひるみかけるがサボは負けじとエースを睨む。

「今回は、今回は大丈夫だったけど！また同じ様な事が無いとは言い切れない！今度はどっかが死んじまうかもしれない、そんな事が起きないためにも俺たちには、保護者が必要なんだ。」

確かにこいつの印象は良くはないけどあの町の大人達よりましだし、嘘についてない事もわかるんだ。」

サボは先ほどまでの不安を思い出し、涙目になりつつもエースに自分の考えを説く。サボのここまで不安そうな表情は初めて見たためエースは自分がどれほどひどい状態だったのかわかり、アルへと向き直る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・よろしく」

アルを睨みつけながらほとんど聞こえない様な声でエースは小さく頭をさげた。

## 第一章 六話

エース達はこの男と行動を共にしていくうちに分かったことと、不思議な事があった。アルの食生活は自分たちと大して変わらないが、一緒に獲物を捕るときに何処からかサーベルを取り出したがその腕は凄惨なものだった…。

---

「おい！来たぞ」

エースが物陰からアルに小声で呼びかける  
アルは了解とばかりに頷くと片手にサーベルをエースには見えないように具現化し、獲物が予定位置に辿り着くのを待つ。

「（今だ！）」

エースがアルに目で合図を送るとアルは草影から飛び出し獣に切り掛かる

「はあーーーー！」

力強い雄叫びをあげサーベルを振り上げ斬りつけた

かのように見えた。

サーベルを振り下ろし叩き斬ったかに見えたとき真ん中でサーベルは折れアルの後ろに飛んでいく、エース達とアルの間に気まずい沈黙がおりる。

沈黙がおりた森の中アルが全速力でエース達の方に逃げてくる、アルの後ろには怒り狂った獣がこちらに向かって突進して来ておりエースとサボは真っ青な顔になり獣に背を向けグレイターミナルに向かって逃げ出した…。

---

エース達はアルにもう二度と狩りをさせない事を決めていたが、不思議な事にアルはエース達の知らないうちに獣を狩ってくる事があった、畏に掛けたのかとも最初は思っていたがそのような痕跡も無いのでサボとエースは不思議に思っていた。

「そつえば…お前らが世話になっているという山賊に顔見せした方がいいか？」

アルがふとした拍子に零した言葉にエースはうげえと顔を歪める

「ダダンの奴のところに行くのかよ」

エースはアルをダダンのところに連れて行くのを渋る。

「?なんか俺に見られちゃ拙いものでもあんのか?」

アルは首を傾げて二人に聞くがサボとエースは不安げに顔を見合わせる。

「その・・・ダダン、山賊なんだよ」

サボはエースが不機嫌そうにそっぽを向いているのでサボが仕方が無さそうにアルに説明する。

アルはサボの説明に片眉をあげ、エースはほとんど不機嫌になつていく、不機嫌になつた二人に挟まれて居心地悪そうに態勢をなおす。

「はあゝ」

頭をボリボリと掻き、溜め息を吐いて悪くなりかけた空気を元に戻す

「んじゃ、そのダダンとか言う奴のところに行くぞ」

アルはサボとエースを立たせるとコボル山にあると言つ山賊達のアジトに向かつて嫌々ながらも山を登り始めた。

## 第一章 六話（後書き）

お知らせ

これから一週間くらい補講のおかげで少々忙しくなるので更新が遅れるかもしれません。

## 第一章 七話（前書き）

復活！

## 第一章 七話

エース達の保護者であるダダン達との会合は失敗に終わったと言つてよかつた。アルはエース達の保護者に当たるのだからと朱雀時代に使つていた赤い礼服に白いマントを装着し出来る限りの礼を尽くす為身だしなみも整えたのだが、ダダン達山賊一家はアルの事を道楽貴族かなにかと勘違いしたのか表面では慇懃な態度を取り揉み手をする笑顔の裏ではさつさと帰れという思いが、後ろで見ていたサボにも見え透いている様な態度を取つたのだ。其れを見てアルは服装を正してサボとエースと合流したときに見せた二人の何とも言えない表情はこの様になる事を予見していたのだと気が付いた、実際には二人はアルの礼装の普段との変わり様に驚き言葉に出来なかつただけなのだがアルはそんな事にも気付かず後で二人になぜ早く言わなかつたのか問いただそうと心の中で決心していた。

そんな事があつて、ダダンの態度に腹を据えかねたアルが額をまるでマスクメロンの様に血管を浮き出させつつも笑顔で小屋を退出してから山道を気まず気に下っているがアル以外の二人の顔は完全に血の気が引けており真っ青だった。

会話も無く無視の聲が耳につく山道で堪えきれずアルは溜め息をついた。

「ふー、俺は二度と彼奴らには会わん。」

どこか疲れきつた声色だったがその中に怒りの色が含まれていない事にサボは安堵した

「そんなにム力ついたなら殴っちまえば良いだろ。」

損案サボの気持ちも考えずに隣にいたエースが爆弾を投げつける

「そんな事言つても、あんな奴らでもお前達の世話を任されてるんだろ……」

何処か困つた様に頬を指で掻きながらアルは答えた

「…別にお前でも良いんじゃないの」

うつすらと頬を染めながらエースはそっぽを向きながらもアルに言う。隣にいたサボはエースのアルを信じる発言を驚愕を隠そうともしず表情に出しながら聞くが、少し考えてみるとエースに対し悪意を持たずに子供として扱ってくれた年上の人はあのハチャメチャな海軍の爺さんを除いて初めてだと思ひ当たるしかもある爺さんの愛情表現はハチャメチャ過ぎて本当はエースを殺そうと思つてゐるのではないかと考えを巡らせてしまふ程だ。

一瞬信じられないものを聞いた様な表情でエースの方を振り返るが数瞬後には嬉しそうな顔でエースの頭をガシガシと撫でる、エースもそっぽを向きつつも満更ではない表情で其れを甘受するがサボの何とも言えない表情に居たたまれなくなつたのか手を払い除けようとするがアルはエースの頭をガシガシと強引に撫で付けていた。

アルはあのダダン一家訪問時にエースに認められた事が余程嬉しいのか最初は照れて顔を真っ赤にしていたエースも溜め息を吐く様



なはしやぎ様を見せていた。アルは出来るだけ落ち着こうとして、いるのは傍目から見ても分かるのだが、行動の端々に歡喜がにじみ出ておりサボ達は最近鬱陶しくて仕方が無かった。

そんな日常の中でアルは二人を呼びつけ真剣な表情で二人に向かい合った

「二人の食事の為にも働こうと思う！」

アルの真剣な表情と二人の何とも言えない顔が三人の間に微妙な沈黙を醸し出していた。

## 第一章 七話（後書き）

大学の方がなんとか一段落したので執筆を再開

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1539z/>

---

0 1

2012年1月12日18時48分発行